珍海撰『決定往生集』に見られる凡夫性の自覺

成瀬隆順

一　はじめに

法然（一一三三～一二一二）による淨土宗成立の背景には、すでに論じられているように、南都三論宗系淨土教の影響があった。[1] 吉藏の著述の中に『觀無量壽經義疏』があることからも、三論宗では淨土教の研鑽が繼承されている。日本では奈良時代に元興寺で活躍した智光が『無量壽經論釋』を著し、晩年に東大寺別當となった永觀（一〇三三～一一一一）も『往生講式』や『往生拾因』を著している。その永觀の影響を受けた珍海（一〇九二～一一五二）は、東大寺東南院の覺樹に師事し三論を學び、併せて華嚴・法相・因明・密教なども修學していた。淨土教關連の著述としては、『菩提心集』・『決定往生集』・『安養知足相對抄』が現存し、これまでの研究は唐の善導（六一三～六八一）が著した『觀無量壽佛經疏』（以下『觀經疏』）卷四・散善義「就行立信釋」の依用が注目される『決定往生集』を中心としたものが多い。

ところで「凡夫性」という言葉は『大集經』[2]や『入楞伽經』[3]、そして『發智論』の異譯である『八犍度論』[4]などにも示される語である。サンスクリットでは pṛthgjanatva と表し「異生性」とも譯され、「凡夫たる性質」との意味合いを持つ。坪井俊映氏は「淨土教に於ける凡夫性について」の中で「淨土教にて云ふ凡夫とは「人間の煩惱的存在の主體的自覺」と云ふことができる。淨土教にては凡夫は佛の本願に救われる第一の機根としている。（中略）自己の煩惱的存在を自覺し「實

有に執するもの」「度し難きもの」が私であると自覺するところに出づる人間觀が淨土教に云ふ凡夫である。これは善導觀經疏散善義に「自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉無有出離之緣」と云ふ自覺に立つ凡夫である[5]」と述べている。この善導の見識に立った坪井論文題目上の「凡夫性」という言葉には、本來そのままでは出離の可能性のない罪惡生死の凡夫が、自らの煩惱的存在を自覺することによって、彌陀の本願に救われ極樂往生ができるという可能性が示されている。それゆえ「佛性」や、天台宗などが標榜する本覺思想と對峙する言葉として、坪井氏や後述する惠谷氏は「凡夫性」という言葉を用いたのだと思われる。本稿ではそれに倣い、彌陀の本願力による極樂往生の可能性を持つ、罪惡生死の凡夫たる被救濟者としての存在という意味合いから、「凡夫性」という語句を用いることにする。

淨土教において凡夫性の自覺を論じる際に、法然をはじめとする鎌倉期以降の淨土教者は、善導の『觀經疏』散善義において三心[6]を解明する中、「信機」と「信法」に深心を分かつ「二種深信」の記述を重視する。これに對し珍海は『決定往生集』ではこの説を用いず、善導集記の『往生禮讃』（以下『禮讃』）「三心釋[7]」中の「深心釋」に見えるほぼ同趣旨の文を依用している。惠谷隆戒氏はこの珍海の『禮讃』等の引用を以て「珍海自身の凡夫性の自覺は表面に現れていないけれども、善導の凡夫性の自覺思想を受容しているのであるから、永觀と同じく痛烈な自己反省はなされた[8]」と一定の評價を與えている。また、明山安雄氏も「『往生禮讃』の深心釋は、「散善義」に説く「一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉、無レ有二出離之緣一二者決定深信彼阿彌陀佛四十八願攝二受衆生一無レ疑無レ慮乘二彼願力一定得二往生一」という深信釋と同一の立場にあるものであるから、珍海は散善義に説く信機釋への注目はみられないが、前述した「往生禮讃」深心釋を引いて人間觀（罪惡意識）の深化を痛感して「昇道決定」を論證していることは、善導教學を吸收繼承しているとみてよいであろう[9]。」と述べる。明山氏は、珍海の信機釋への留意を疑問視しつつも惠谷氏と同様の考えを示しているが、果たしてそうであろうか。

『決定往生集』第五修因決定での依用が注目される、いわゆる法然の「淨土宗開宗の文」は、『觀經疏』散善義「三心釋」の「深心釋」に説かれている[10]。諸氏の研究[11]により天平年間には請來が確認される『觀經疏』ではあるが、平安末期における明確な流布の實態は、殘念ながらいまだに解明されていな

い。その「散善義」を初めて引抄[12]したのは源隆國編纂の『安養集』（一〇七一頃）であり、該當箇所は分割されずに編纂されている。[13] 奈良朝より傳わる諸本の何れかによって直接か、もしくは『安養集』により間接的に閲覧することはできるため、『觀經疏』散善義中に深心を釋する「二種深信」の文を、珍海が未讀であった可能性は低いと考えて差し支えないと思われる。そこで、なぜ珍海は『觀經疏』ではなく『禮讃』を用いたか、その理由の検討を通して彼の凡夫性の自覺についての考察を行い、それに付隨する他力への關心を検討してみたい。

二　三心解釋の異同

まずはじめに三心について概説しておきたい。周知のごとく淨土教における三心は、『觀無量壽經』の九品人の往生を明かす中、次のように上品上生に説かれる至誠心・深心・廻向發願心の三つの心を指し示す。

佛告二阿難及韋提希一、凡生二西方一有二九品人一。上品上生者、若有二衆生一願レ生二彼國一者、發二三種心一卽便往生。何等爲レ三。一者至誠心。二者深心。三者廻向發願心。具二三心一者必生二彼國一。[14]

しかしながら、ここではそれ以上の説明はなされていない。三心という名稱は『觀無量壽經』のみにあるわけではなく、廣く他の佛教經論中に見出される言葉である。若干の例を擧げれば、まず『維摩經』の「佛國品」では「寶積、當レ知、直心是菩薩淨土。菩薩成佛時、不諂衆生來二生其國一。深心是菩薩淨土。菩薩成佛時、具二足功德一衆生來二生其國一。菩提心是菩薩淨土。菩薩成佛時、大乘衆生來二生其國一。[15]」と直心・深心・菩提心（大乘心）の三心を説く。また、『大乘起信論』では「復次信成就發心者、發二何等心一。略説有二三種一。云何爲レ三。一者直心。正念二眞如法一故。二者深心。樂レ集二一切諸善行一故。三者大悲心。欲レ拔二一切衆生苦一故。[16]」と、菩薩の發心を段階的に三種に分け、そのうちの「信成就發心」を略説して直心・深心・大悲心の三心に該當させている。これらの三心と淨土教で説かれる三心との異同は、『觀無量壽經』においては内容が全く示されていないため、同一として扱うものと、別のものと解釋する二通りの立場が見られる。

同一の立場を取るのは主に天台系の淨土教解釋であり、智顗に假託された『觀無量壽經疏』では、「至誠心者、卽實行衆

生、至之言專、誠之言實。深者、佛果深高以心往求故云深心。亦從深理生、亦從厚樂善根生。故十地經言、入深廣心。涅槃經云、根深難拔故言深心。」[17]と、深心を釋するにあたり『十地經』『涅槃經』からの記述を引用して論じている。また、知禮は『觀無量壽佛經疏妙宗鈔』において「言至誠等三心者、此與起信論中三心義合。彼云、一者直心。正念眞如故。二者深心。樂集一切諸善行故。三者大悲心。欲拔一切衆生苦故。」[18]と、至誠心などの三心は『大乘起信論』に説かれる三心と義は同じであると明示している。そして、天台系統ではないが迦才の『淨土論』には、次のように『維摩經』に説かれる直心・深心・大乘心（菩提心）や、『大乘起信論』に説かれる直心・深心・大悲心と同一なものとして捉えた解釋がなされている。

如上品上生人、發三種心、卽得往生。其三種心者、一是至誠心。二者是深心。三是廻向發願心。此之三心、依起信論、判在十解初心。如起信論云、信成就發心、在十信終心也。發三種心、始入十解位中。三心者、一是直心。謂正念眞如法故。卽是觀經中至誠心。至誠與直心、義同名異耳。如維摩經明、淨土道場一行之初、竝有三心。同觀經也。觀諸經論、但明一切行初必發此三心。當知、此三心是萬行之始。既是萬行之初。故寧得下生彼卽悟無生到中八地上也。二是深心。觀經亦名深心。三是大悲心。觀經名廻向發願心。若無大悲、卽不能發願廻向。此亦義同名異也。起信論三心、既在十信終發。當知、觀經上品上生、卽在十解初心明矣。言至彼得無生法忍者、此是緣觀、得無生法忍也。[19]

このように迦才は、三心は上品上生人のみが發すものとし、『維摩經』と『大乘起信論』に說かれる三心と『觀經』所說の三心とは義同名異であるとの觀點に立つ。そして、『大乘起信論』によって三心は十信の終心に發こすものとされるので、上品上生を十解初心に位置づけている。これと異なるのが慧遠の三心解釋である。直接的に異同を判じてはいないが、以下のように『觀無量壽經義疏』に三心を釋している箇所が二つある。

依此觀經因亦衆多。麁要爲四。一修觀往生。觀別十六備如上辯。二修業往生。淨業有三亦如上說。三

修心往生。如二下文說一、心有二三種一。一者誠心。誠謂實也。起レ行不レ虛實心求レ去故曰二誠心一。二者深心。信樂慰至欲レ生二彼國一。三者廻向發願之心。直爾趣求說レ之爲レ願挾善趣求說爲二廻向一。願有二二種一。一願生二彼國一。二願見二彼佛一。所行所成亦爾。此是第三修心往生。[20]

言レ誠者是其實心。起行不虛名爲二誠心一。又實求レ往亦名二誠心一。言二深心一者、慰至心也。起行慰至名曰二深心一。求レ去慰至亦曰二深心一。廻向發求去心也。狹善而求名曰二廻向一。謂廻二己善一向二大菩提一、又廻二己善一向二彼國一生故名二廻向一。廻向之義廣如二別章一。[21]

特に深心に注意を拂ってみると、慧遠は深心を、心を込めて念入りに信じ願う意味で、信樂慰至する「慰至心」と定め、「起行慰至」と「求去慰至」の二種に開示している。しかしながら、ここでの三心もまた上品上生のみに限られた淨土の因であり、善導の「三心釋」に比べると未だ判然としていない。

ところで、珍海は『決定往生集』より以前の大治三年（一一二八）、三十七歳の時に記した『菩提心集』の中で、三心について次のように述べている。

問。九品往生はいかに辯ふべき。答。あらあらこれをいはん。其上品の三生は菩薩の位定れる人。中品の三生は聲聞の善根を行ふ人。下品の三生は凡夫の罪人のすくはれたるなり。上品上生の人は、三の心、三の業を具ふ。至誠心　誠をいたす心　深心　深き心　回向發願心　善を往生に回向し往生を求る心　是を三の心といふ。三つの業とは慈心不殺具諸戒行　物を殺さず戒をたもてり　讀誦大乘、方等經典　大乘經をよみたてまつる　修行六念、回向發願　三寶を念ずる事を三つとし布施と戒行と及び天を念ずるを加へて六とす　此功德を具へて一日乃至七日をふれば　すなはち佛無數の化佛、百千の大衆、七寶の宮殿と具に來り迎へ給ふ。觀音の金剛台に乘りて、すなはち彼國に生れぬ。[22]

この『菩提心集』の中では、三心の解說は簡潔なものであり、迦才や慧遠など他の淨土敎家と同樣に、珍海も三心は上品上生人が發具すべき心として認識していたことが窺える。おそらく、『菩提心集』著述の時點では善導の著作を閱覽していなかったのであろう。これに對し、後に述べるように、三心は九品に通じた往生の正因であると明かし、詳細に論じた

のが、善導の『禮讃』と『觀經疏』散善義の「三心釋」に他ならない。

三　「出離」に關する珍海の考え

珍海は『決定往生集』第三昇道決定の中で、曇鸞撰『往生論註』[23]巻上の八番問答の第一を引用している。その引用では、世親の『往生論』廻向章中において「普共諸衆生　往生安樂國」と説くのは何れの衆生と共に往生するのかという問いに對し、『無量壽經』の一切外凡夫人と『觀無量壽經』の下下品生の經説を引いて答えている。その後、曇鸞は「下品凡夫但令下不レ誹ニ謗正法一信佛因緣皆得中往生上。」と、正法を誹謗しなければ「信佛因緣」によって誰もが往生を得られると述べ、下品人の往生不退について説示している。さらに續けて、珍海は『禮讃』「三心釋」中の至誠心と廻向發願心の前後二心を省略して、次のように「深心釋」のみを引用する。

導和尚禮讃云、問。今欲ニ勸レ人往生一者、未レ知、若爲安心・起行・作業定得レ往ニ生彼國土一也。答。必欲レ往ニ生彼國土一者、如ニ觀經説一者、具ニ三心一必得ニ往生一　乃至信下知身是具ニ足煩惱一凡夫善根薄少、流ニ轉三界一不上出ニ火宅一、今信中知彌陀本弘誓願及下稱ニ名號一、下至中十聲等上、定得乙往生甲、乃至一念無レ有ニ疑心一。故名ニ深心一云云　既言ニ具足煩惱凡夫一、直是常沒世俗凡夫得ニ往生一也。[24]云云

珍海撰『決定往生集』に見られる凡夫性の自覺（成瀬）

ここで善導は、どのように安心・起行・作業すれば必ず彼の西方極樂國土に往生できるかとの問いに、『觀經』に説かれているように、三心を具えれば必ず往生ができると答える。そして、自らは煩惱に苛まれている凡夫であり、善根は薄少で三界に流轉して火宅より出ることのできない存在であると信知し、今彌陀の本弘誓願である名號を稱すること下至十聲等に及べば、必ず往生することが可能であると信知して、それを一念も疑う心がないからこそ、深心と呼ばれるのであると説く。いうまでもなく、この『禮讃』の「深心釋」は、次に引く『觀經疏』散善義に深心を釋して「信機」と「信法」に深心を分かつ、いわゆる「二種深信」の記述とほぼ同じ趣旨が述べられている。

二者深心。言ニ深心一者、卽是深信之心也。亦有ニ二種一。一者決定深信、自身現是罪惡生死凡夫、曠劫已來常沒常流轉、無レ有ニ出離之緣一。二者決定深信、彼阿彌陀佛四十

八願攝受衆生」。無疑無慮、乘彼願力定得往生」。又決定深信、釋迦佛說此觀經・三福・九品・定散二善、證讃彼佛依正二報」、使人欣慕」。又決定深信、彌陀經中十方恆沙諸佛證勸一切凡夫決定得生…。[25]

古來この二つの記述については「善根薄少」と「無有出離之緣」の差異が論じられているが、珍海にとっては散善義の「無有出離之緣」では齟齬が生じてしまう。というのも、衆生は自らの力で出離できる存在であることが珍海の考えであり、『決定往生集』の序論に次のように述べている。

良以衆生自有出離之分」。淨土正是引物之方。若言凡愚卑劣不堪往生」者、則衆生終無出離之期」、諸佛卽闕引物之功」。定知依教願生必得往生」。[26]

珍海の主張では、衆生は自ら出離できる分際であり、極樂淨土はそのような衆生を引接する方處であるから、教文によって往生を願うならば必ず往生することができるというのである。そしてこの「出離之分」について第四種子決定の中で、珍海は以下のように二義を擧げている。

第四種子決定者、此有二義」。一者中道佛性爲成佛因」、亦名正因」、亦名本覺」。衆生本來有此覺性」。由此性」故必得解脫」。道理雖然、若無聞法發心等緣」、此性不能自然解脫」。今遇釋迦說西方教」、聞而奉行、內有佛性」。待此外緣」因緣具足必應出離」。…（中略）…二者西方行者必有宿善」…[27]

第一に、衆生は往生の因として中道佛性を有しているため、正因とも本覺とも呼ばれるその覺性により解脫を得られるのであり、聞法發心等の緣と、因なる佛性が具足すれば、必ず出離することが可能であるという。また次に、西方の行者には宿善があるとするので、「無有出離之緣」とする『觀經疏』では齟齬が生じてしまう。そのため「善根薄少」と、往生の因を少なからず認める『禮讃』の記述が適していたことが、『禮讃』「深心釋」の引用理由として一つ考えられるのである。中道佛性を備えていることは、永觀も『往生拾因』第九因の中で次のように述べている。

今法身者、入阿字門」悟一切法本不生際」、是則中論所說八不之中第一不也。謂緣生諸法各無自性」。無自性」

故本不生也。…（中略）…佛與二衆生一同體無異。衆生同體佛、利二穢土一無レ障、諸佛同體衆生、往二淨土一何隔。[28]

さらに中道佛性と宿善の二つの往生の因により、『往生拾因』第九因の最後に「今觀二行者法身同體一、妄輕二自身一勿レ生二疑惑一矣。[29]」と述べ、また『往生講式』では「我等思二往昔結緣一、宿善如二恆沙一、妄輕二自身一心不二怯弱一。[30]」と、自らを輕んじることを誡めている。この考えを受け珍海は、『決定往生集』第三昇道決定で、「此等衆生生二彼國一已經久、乃發二大菩提心一、入二不退位一。世俗凡夫常沒之類、寧可三於レ中自憚二非分一乎。[31]」と往生への非分を憚る必要はないと述べる。

先の『決定往生集』の『禮讃』引用の後に、珍海が「既言二具足煩惱凡夫一、直是常沒世俗凡夫得二往生一也。」と述べていることは、一見すると「信機」・「信法」に深心を分かつ、善導的な凡夫性の自覺がなされているように受け取れる。しかしながら、これらの姿勢より判斷するに、「信機」への留意は餘りなされなかったと考えられ、法然以降の鎌倉淨土教者の觀點から見れば、徹底した凡夫の自覺意識には達していなかったと理解できよう。これを證する論據として『決定往生集』の中心となる第五修因決定で、慧遠の說に倣い、『觀經』に依って淨土の因を明かす三番目の「修心往生」を釋するにあたり、次のように、前述した慧遠の『觀無量壽經義疏』を引用して三心を說明していることが擧げられる。

三修心往生。心有二三種一。一至誠心。起行不虛實心求レ往。二者深心。信樂愍至欲レ生二彼國一。三廻向發願心。趣二求淨土及佛所行所成一、故名爲レ願。狹善廻求故名二廻向一。此是第三修心往生。[32]

惠谷氏などの言うように「善導の凡夫性の自覺思想を受容して」『禮讃』の「深心釋」を引用したのならば、善導の「深心釋」とは異なった慧遠の深心解釋を、何故珍海は引用するのであろうか。むしろ坪井俊映氏も述べるように、『禮讃』「深心釋」の引用は、曇鸞の『往生論註』に說かれる「信佛因緣」の「信」を解明するため、[33]さらに言えば、『決定往生集』の主題である「信心」の論證のために用いられたと考えて差し支えないであろう。この「信佛因緣」という言葉は『往生論註』の文脈上、非常に重要な語句であり、以下のように『往生論註』冒頭の龍樹撰『十住毘婆娑論』の難易二道說をもとに、自力と他力の優劣を示す有名な記述にも見出される。

謹案龍樹菩薩十住毘婆沙云、菩薩求阿毘跋致有二種道。一者難行道。二者易行道。難行道者、謂於五濁之世於無佛時求阿毘跋致爲難。此難乃有多途。粗言五三以示義意。一者外道相。修槃反。善亂菩薩法。二者聲聞自利障大慈悲。三者無顧惡人破他勝德。四者顚倒善果能壞梵行。五者唯是自力無他力持。如斯等事觸目皆是。譬如陸路步行則苦。易行道者、謂但以信佛因緣願生淨土。乘佛願力便得往生彼淸淨土。佛力住持卽入大乘正定之聚。正定卽是阿毘跋致。譬如水路乘船則樂。[34]

無論、「信」を重んじることは佛教全般に共通する教義であり、吉藏の『觀無量壽經義疏』[35]や曇鸞の『往生論註』[36]にも引用される『大智度論』巻一に、「佛法の大海には信もて能入となす」と示されるように、佛道の基本となる心作用である。

問曰、諸佛經何以故初稱如是語。答曰、佛法大海信爲能入、智爲能度。如是義者卽是信。若人心中有信淸淨、是人能入佛法。若無信是人不能入佛法。不信者言是事不如是。是不信相。信者言是事如是。[37]

この『大智度論』の引用こそないが、「信」と「決定」の不可分な關係を重視する珍海は、『決定往生集』の序論で、往生の決定を示すために教文・道理・信心の三事を擧げる中、次のように「信心」を定義付けている。

其信心者、若於如上文理之中心生信受卽名決定。以決定者爲信相故。故觀經云、必生淨國心得無疑。已上無疑卽信。決定稱也。又由信故必得往生。故經說言、若能深信無孤疑者必得往生阿彌陀佛國。鼓音聲經由此應知、下輩之人雖未一向專精信受、而由暫信亦得往生。此乃信心決定義也。[38]

「信心」とは上述した教文と道理の中において、心に信受することが生じたならば、それを決定といい、決定が信の相であると珍海は定義する。そして、疑いなきことが決定と稱される信であり、またその信によって必ず往生することができると說く。さらに『鼓音聲王經』[39]を引用し、深く信じて疑いがなければ、阿彌陀佛國に往生が可能であると强調すること

からも、『決定往生集』の『禮讃』「深心釋」引用は、曇鸞の『往生論註』に説かれる「信佛因緣」の「信」を解明するために用いられたという、珍海の意圖が理解できよう。

三　『往生要集』の影響と「通九品」の解釋

また、これまでの研究で明かされているように、源信撰『往生要集』が與えた影響も看過できない。[40]『往生要集』の大門第五「助念方法」では修行の四相、卽ち四修の際に用心することは何かとの問いに、『禮讃』の「三心釋」を『決定往生集』とは異なり、三心を省略することなく全て引用している。

問。既知、修行總有二四相一。其修行時、用心云何。答。觀經云、若有二衆生一願レ生二彼國一者、發二三種心一卽便往生。一至誠心、二深心、三回向發願心。善導禪師云、一至誠心、謂禮拜・讃歎・念觀三業必須二眞實一故。二深心、謂信下知自身是具コ足煩惱一凡夫、善根薄少、流コ轉三界一未ヒ出二火宅一、今信㆓知彌陀本弘誓願、及下稱二名號一下至中十聲一聲等上、定得乙往生甲。乃至一念無レ有二疑心一。三回向發願心、謂所作一切善根、悉皆回向願二往生一故。具二此三心一必得二往生一。若少二一心一卽不レ得レ生。略抄レ之。經文雖レ在二上品上生一、如二禪師釋一者、理通二九品一。餘師釋不レ能レ具　鼓音聲經云、若能深信無二狐疑一者、必得レ往二生阿彌陀佛國一。涅槃經云、阿耨菩提、信心爲レ因。是菩提因雖二復無量一、若說二信心一則已攝盡　已上　明知、修レ道以レ信爲レ首。[41]

珍海撰『決定往生集』に見られる凡夫性の自覺（成瀨）

ここでは、前述の『決定往生集』の序文で、「決定」と「信」の關係を示すために用いられた『鼓音聲王經』と同文の引用が確認できる。源信の「修レ道以レ信爲レ首」との主張は、『決定往生集』が「信」を主題に記述されることに符合する考えでもある。さらに注意すべきは「如二禪師釋一者、理通二九品一」と註にある、三心が上品上生のみに限られないとする說示である。この箇所は法然が『往生大要抄』で「されは善導の觀經の疏に九品の文を釋する下に、一一の品ことに、辯定三心以爲正因とさためて、此三心は九品に通すべしと釋し給へり。惠心も是をひきて、禪師の釋のときは、理九品に通すへしとこそはしるされたれ。[42]」と示すように、散善義に說かれる十一門義によって會通されていると見るべきであろう。善導は散善義の冒頭に「從此已下次解三輩散善一門之義」と述べ、世福・戒福・行福の三福を正因とし、上品上生から下品下品に至るまでの九品を正行とするのである。そしてこの九品の

一々に以下の十一門の義があるとする。

十四就上輩觀行善文前總料簡卽爲二十一門一。一者總明二告命一。二者辯二定其位一。三者總擧二有緣之類一。四者辯二定三心一以爲二正因一。五者正明レ簡三機堪與二不堪一。六者正明二受法不同一。七者正明二修業時節延促有レ異。八者明下廻二所修行一願レ生中彌陀佛國上。九者明下臨二命終一時聖來迎接不同、去時遲疾上。十者明二到レ彼華開遲疾不同一。十一者明二華開已後得益有レ異。今此十一門義者約二對九品之文一、就二一一品中一皆有二此十一一。卽爲二一百番義一也。又此十一門義就二上輩文前一總料簡亦得。或就二中下輩文前一各料簡亦得。又此義若以レ文來勘者、卽有二具不具一。雖レ有二隱顯一、若據二其道理一悉皆合レ有。爲二此因緣一故須二廣開顯出一。欲レ令二依行者易レ解易レ識也。上來雖レ有二十一門不同一、廣料二簡上輩三品義意一竟。(43)

このように、文については具・不具、隱・顯があるけれども、道理によれば九品全てにこの十一門の義があると說いている。であるから、四番目の「辯定三心以爲正因」も九品の一々に通じているということであり、結果として三心が九品に通じていることが理解できる。實はこの十一門義は管見の限りでは、散善義を初めて引用したとされる『安養集』には見出すことができない。(44) 珍海が『安養集』によって『觀經疏』を披見しているならば「通九品」は了解できず、從って『往生要集』に導かれ、上品上生のみに限る記述のない『禮讃』「深心釋」を用いたとも考えられるのである。

四　他力への關心

以上、珍海の『禮讃』「深心釋」の引用が、「信機」「信法」の「二種深信」を說示した善導的な凡夫性の自覺のためになされたのではなく、むしろ曇鸞が示す「信佛因緣」の「信」の解釋を補强するために、さらに言えば、『決定往生集』の主題である「信心」の論證のために用いられたことを考察してきた。ここで問題となるのが、曇鸞が「信佛因緣」を說く『往生論註』の存在である。

「信佛因緣」に關連して參照した『往生論註』冒頭の難易二道の文章は、とりもなおさず自力と他力の優劣を示すものであり、その『往生論註』等の引用により、珍海の他力思想への關心が窺えるのである。井上光貞氏は、法然・親鸞と源信の凡夫觀の相違を述べるにあたり、「法然でも親鸞でも、凡夫

の自覚は強烈であって、これは端的に反射的に、佛本願への隨順となった。凡夫の自覚の深まりはそれが強くあれば強くあるだけ、他の一切を廃除して佛本願への隨順の度を深め、遂には絶対の帰依にいたるのであった。これに對し、源信の異なるところは、目標としての修道を守り續けたところにある。[45]」と、源信としては自力を排さない立場にあったとしている。その源信と同じく劣ながらも自力を認め、凡夫性の自覚意識は未だ熟してないと考えられる珍海ではあるが、『往生論註』の引用をはじめとして「佛本願への隨順」、すなわち本願力による他力的な往生を肯定する表現が、『決定往生集』の中に散見されるのである。すでに研究がなされているように、慧遠や吉藏は他力思想を積極的に認めていない。[46]そのため、他力に關する引用は主に曇鸞・善導に依據している。まず、『決定往生集』の序文における引用を見てみたい。

> 卽由二佛力一定得二往生一、故亦名爲二緣決定一也。故導和尙依二觀經一云、滅後凡夫乘二佛願力一定得二往生一。[47] 經正云二爲未來世一切凡夫一也。

この前段階において因・緣・果の三種類に信心による「決定」を開示し、そのうちの緣決定を解き明かすために、滅後の凡夫は佛願力に乘じれば必ず往生できると說く、善導の『觀念法門』を引用している。さらに、因・緣・果の三決定を十門に開いた中の、緣決定に分類される第八弘誓決定を偈誦で表現し、次のようにまとめている。

> 八弘誓決定　凡夫淺薄　自力雖レ劣　乘二佛願力一　生死易レ渡　諸有願求　決定往生[48]

ここで明らかなように、珍海は凡夫に劣としながらも自力を認めている。その上で、智慧淺薄な凡夫は佛願力に乘じれば、他力によって生死輪廻の迷いを渡ることは容易であるから、決定往生することを願求せよという。次に引用する第八弘誓決定の本文では、「設我得レ佛、十方衆生至心信樂欲レ生二我國一乃至十念、若不レ生者不レ取二正覺一。唯除二五逆誹謗正法一」の第十八願を本願と呼び、重要視している。

> 第八弘誓決定者、本願中云、至心信樂欲生我國、乃至十念若不生者不取正覺。唯除五逆誹謗正法 已上 如レ是反覆簡別分明故名二決定一。又由二願力一令三諸衆生定生二淨

珍海撰『決定往生集』に見られる凡夫性の自覚（成瀨）

土。故名決定。迦才師云、如經中說、阿彌陀佛與觀世音大勢至、擧慈悲棹乘大願船、浮生死海、就此娑婆世界呼喚衆生、令上大願船送著西方上。若有衆生、肯上大願船者、竝皆得去。此是易往已上二文合取　下劣凡愚三障雖重、若乘願力、速渡生死。此則以信稱念佛名號爲乘也。言大願者辯大事故、起大行故、修大善根。滿此願故、依深大理起此願故、故稱本願爲大願也。啓芳法師花陰人也。念阿彌陀佛、願得往生、於夜夢見在一佛堂中。正當佛前有一僧。名曰法藏。御一大車就佛堂內迎令上車、載向西而去也。法藏者卽阿彌陀佛也。車者四十八大願也。迦才淨土論出之云爾。良以四十八大願運載衆生故現爲車乘、令渡生死故亦爲船舫也。願力大故能接一念十念及狐疑者。永出流轉置不退處。若唯自力何能如此。應下以信心乘本願船易渡生死之苦海速到中菩提之寶所上。但能恃於往昔悲願應當待其來迎。勝利何復顧善根之薄少。專可任世尊之弘誓者也。(49)

その第十八願の引用の後に、迦才撰『淨土論』から「大願船」の譬喩を用いて阿彌陀佛の「願力」を解き明かし、下劣なる凡愚は三障が重いけれども、もし阿彌陀佛の願力に乘じることができれば、速やかに生死輪廻の苦海を渡ることが可能であると示している。次に啓芳法師(50)の夢中の說として、四十八願を大きな荷車に喩えた譬喩を引き、これら二つの譬喩でもって本願力による往生の易行なることを說く。もし、ただ自力のみであったならこのようにはならないであろうと、佛願力による他力往生の優位性を、珍海も認めているのである。また、「應下以信心乘本願船易渡生死之苦海速到中菩提之寶所上。」とあるように、本願を信じる「信心」によって極樂往生を期する姿勢がここでも確認できる。この第八弘誓決定で「勝利何復顧善根之薄少。」と珍海が述べるように、「無有出離之緣」とする『觀經疏』よりも、「善根薄少」とする『禮讚』の引用が、劣ながらも自力を認める珍海の意圖に適していたことが理解できよう。

さらに、續く第九攝取決定では『觀無量壽經』の第九眞身觀の文より「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」(51)の有名な經文を引用し、「光明攝取」という佛の威神力による他力的救濟を明かしている。その後引用されるのが、以下の『往生論註』(52)卷末の記述である。

非二唯光明攝取不レ捨、亦現二化身一常來守護。是故行者自力雖レ劣依二佛威神一定得二往生一。鸞師云、劣夫跨レ驢不レ上、從二轉輪王行一便乘二虛空一遊二四天下一、名爲二他力一。愚哉、後之學者聞二他力可レ乘當レ生二信心一。勿二自局分一云云。淨影云、義章由二佛强緣一方能悟レ道。離レ佛不レ能故名爲レ難。此解下惡趣難處衆生由二佛緣力一乃得中悟道上。具縛凡夫難レ生二淨土一、而由二佛力一乃可レ得レ生。又經說言、無量壽會雖レ不三專念二無量壽佛一、亦非中恆種衆多善根上、隨レ己修二行諸善一、功德廻二向彼佛一。乃至卽隨二化佛一往二生其國一云云。善行雖レ微佛力恃故具縛凡夫去レ之甚易。學者於レ此宜須審レ之。(53)

ここでは、『往生論註』の巻末において自力と他力の優劣を示すのに際し、自力・他力雙方の例示のうち、他力の譬喩のみを引用している。『往生論註』では、人は三塗を畏れて持戒し、持戒によって禪定が修され、禪定により神通が修習され、その神通力によって四天下に遊ぶのが自力であると說かれている。それに對し、劣夫は驢馬に上がることもできないが、轉輪聖王の行に從えば虛空に乘じて四天下に遊ぶことが可能となるという喩えで他力の優位性を示している。さらに、他力に乘じることを聞いたならば信心を生じるべきであり、自ら局分してはならないと曇鸞は戒めるのである。この引用文においても「信心」の重要性が繰り返されており、最後に珍海は善行がわずかであっても、他力である佛力に恃めば具縛の凡夫であっても往生することは甚だ易行であることを、學ぶものに審らかにすることを促している。ここにおいて、學者に他力易行の更なる研鑽を促すものの、未だ官僧、學僧として完全には自力を排し切れない珍海の葛藤が讀み取れるのである。

ここまで、主に曇鸞の『往生論註』の引用から、珍海の他力への關心の深さを見てきたが、實は既出の『決定往生集』第三昇道決定の『禮讚』「深心釋」引用の前に引かれる、吉藏の『觀無量壽經義疏』を引用方法にも、珍海の他力への關心が見て取れるのである。前述したように、慧遠や吉藏は他力を積極的に認めていない。そのことに關して伊東昌彥氏は「慧遠には彌陀の願力救濟への言及がないと言われるが、意識的にそれを排しているというよりも、より客觀的に經典の所說に向き合っているため、自から十六種觀や上品の修行に重きが寄せられているものと言える。彌陀の救濟的側面に對する關心が薄いことは確かだが、全く言及がないことではない。つまり、下品往生について、過去世の發心修行を出すこ

とは慧遠も吉藏も同じだが、その根據になると、慧遠がこれを彌陀に歸するのに對し、吉藏は過去世における自己の修善、修因のみに根據を求めるのである。吉藏は彌陀の本願力について、これを衆生往生と結びつけることはせず、他力思想のような、願力に乘じて往生をするという發想を持たない。[54]」と述べている。この過去世における修善、修因を必要とする吉藏『觀無量壽經義疏』の引用は以下の如くである。

下品善弱果强者、下品人都不レ修レ善而得二大果一、故善弱果强也。又下品所ヨ以得二大果一者、明下彼現在雖レ不レ修レ善過去或經二發心一、今聞二大乘一復得二發心一等上也。[55]

『決定往生集』での引用部分[56]を傍線で示したが、その部分のみでは、善が弱く果が强い下品人は、すべてが修善でなくとも大いなる果を得られるからと、佛願力を期待する記述になってしまっている。しかし、本來は後續の文章に示すように、吉藏は過去世における發菩提心を經ているからと說示しているのであり、珍海の引用の仕方には、明らかに佛願力による他力への注目が認められるのである。

五　結び

以上、善導の『禮讚』「深心釋」の引用理由を考察することによって、『決定往生集』に見られる凡夫性の自覺について檢討してきた。珍海は決定往生の因として衆生に本來備わる佛性と宿善を認めるため、「無レ有二出離之緣一」とする『觀經疏』では齟齬をきたし、敢えて用いなかったと考えるのが自然の流れであろう。『往生要集』と同じように、上品上生のみに限られていない『禮讚』「深心釋」の引用はなされるが、これは下品下生の世俗の凡夫が、疑心無くして必得往生する可能性を主に示すためであり、曇鸞『往生論註』に說かれる「信佛因緣」の「信」を解明するため、さらに言えば、『決定往生集』の主題である「信心」の論證のために用いられたと考えられる。また、決定を信の相と定義付ける珍海にとって、「信佛因緣」を重視する曇鸞の他力思想は看過できるものではないが、劣ながらも自力を認める珍海の立場上、やはり「無レ有二出離之緣一」とする『禮讚』の引用が適していたことが理解できた。確かに、『禮讚』引用の後に珍海が「既言二具足煩惱凡夫一、直是常沒世俗凡夫得二往生一也」と述べていることは、一見すると善導的な凡夫性の自

覺がなされているように受け取れるが、從來の研究のように善導の凡夫觀を受容しているとの考えには首肯し難い。『決定往生集』の中心となる第五修因決定では慧遠の「三心釋」を用い、また自らを輕んじることを誡め、尙かつ劣ながらも自力を認める姿勢からも、「信機」に對する留意はさほどなされているとは言えず、「信機」「信法」の「二種深信」を重んじる法然以降の鎌倉淨土教者の觀點から見れば、凡夫の自覺意識は高くはなかったと理解できるのである。

《註》

（1）石田充之『日本淨土教の研究』（百華苑、一九五二年）三四頁、井上光貞『日本淨土教成立史の研究』（山川出版社、一九五六年（新版一九七五年））、普賢晃壽『日本淨土教思想史研究』（永田文昌堂、一九七二年）一九九頁等を參照。

（2）『大方等大集經』巻八（大正一三・四八頁上）に、「善男子、菩薩摩訶薩發二菩提心一亦復如レ是、離二九種性一得二淨印三昧一。何等爲レ九。一者凡夫性。二者信行性。三者法行性。四者八忍性。五者須陀洹性。六者斯陀含性。七者阿那含性。八者阿羅漢性。九者辟支佛性。離二是九性一入二佛種性一得二淨印三昧一。以二其淨一故勝二於一切聲聞緣覺一、施二於一切衆生光明一。」とある。

珍海撰『決定往生集』に見られる凡夫性の自覺（成瀬）

（3）『入楞伽經』巻四（大正一六・五三五頁上）に、「大慧、分ニ別彼迷惑法顚倒非顚倒一者、能生二二種性一。何等二種。一者能生二凡夫性一。二者能生二聖人性一。大慧、彼聖人性者、能生二三種差別之性一。所謂聲聞・辟支佛・佛國土差別性故。大慧、云何毛道凡夫分ニ別迷惑法一、而能生二彼聲聞乘性一。大慧、所謂執ニ著彼迷惑法自相同相一、能成二聲聞乘性一。大慧、是名四迷惑法能ニ生能ヨ成聲聞乘性一。大慧、云何愚癡凡夫分ニ別迷惑法一、而能生二彼辟支佛乘性一。大慧、所謂執ニ著彼迷惑法一、觀ニ察諸法自相同相一不レ樂二憒鬧一、能生二辟支佛乘性一。大慧、是名四迷惑法能ニ生能ヨ成辟支佛乘性一。大慧、云何智者卽分ニ別彼迷惑之法一、能生二佛乘性一。大慧、所謂見二彼能見可見惟是自心一、而不レ分ニ別有無法一故。大慧、如レ是觀ニ察迷惑之法一、能ニ生能ヨ成如來乘性一。大慧、如是名爲二性義一。」とある。

（4）『阿毘曇八犍度論』巻三（大正二六・七八三頁中～七八四頁中）等を參照。

（5）坪井俊映「淨土教に於ける凡夫性について」（『印度學佛教學研究』二・一九五三年）を參照。

（6）淨土教の三心の概說ならびに鎌倉期以降、法然と門流の善導『觀經疏』に述べられる三心の解釋は、石井教道『選擇集全講』（選擇集全講刊行後援會、一九五九年（平樂寺書店、一九六七年再版））等に詳述されている。

（7）『往生禮讚』（大正四七・四三八頁下）に、「問曰、今欲二勸レ人往生一者、未レ知、若爲安心・起行・作業、定得レ往ニ生彼國

土」也。答曰、必欲レ生二彼國土一者、如二觀經說一者、具二三心一必得二往生一。何等爲レ三。一者至誠心、所謂身業禮拜彼佛一、口業讚歎稱揚彼佛一、意業專念觀察彼佛一。凡起二三業一、必須二眞實一。故名二至誠心一。二者深心、卽是眞實信心。信知自身是具足煩惱凡夫、善根薄少、流轉三界、不出二火宅一、今信知彌陀本弘誓願、及稱二名號一、下至十聲一聲等、定得往生、乃至一念無有疑心一。故名二深心一。三者回向發願心、所作一切善根悉皆回願二往生一。故名二回向發願心一。具二此三心一必得レ生也。若少二一心一卽不レ得レ生。如二觀經具說一。應レ知。」とある。法然の『選擇本願念佛集』（大正八三・一二頁上）にも引用されている。

（8）惠谷隆戒「日本淨土教思想史上における凡夫性自覺過程について」（『佛教文化研究』一三・一九六六年）、『淨土教の新研究』（山喜房佛書林、一九七六年再錄）二〇二頁を參照。

（9）明山安雄「南都淨土教と善導教學」（『惠谷先生古稀記念淨土教の思想と文化』（佛教大學・惠谷隆戒先生古稀記念會編、一九七二年）所收）四三二頁を參照。

（10）『觀經疏』卷四・散善義（大正三七・二七一頁上～二七二頁中）に、「次就レ行立レ信者、然行有二二種一。一者正行。二者雜行。言二正行一者、專依二往生經一行レ行者是名二正行一。何者是也。一心專讀コ誦此觀經・彌陀經・無量壽經等一、一心專コ注思ヲ想觀察憶念彼國二報莊嚴一、若禮卽一心專禮二彼佛一、若口稱卽一心專稱二彼佛一、若讚歎供養卽一心專讚歎供養。是名爲レ正。又就二此正中一、復有二二種一。一者一心專念二彌陀名號一、行住坐臥不レ問二時節久近一念念不レ捨者、是名二正定之業一。順二彼佛願一故。若依二禮誦等一、卽名爲二助業一。除二此正助二行一已外自餘諸善悉名二雜行一。若修二前正助二行一、心常親近憶念不レ斷、名爲二無間一也。若行二後雜行一卽心常間斷。雖レ可二廻向得レ生、衆名二疎雜之行一也。故名二深心一。三者廻向發願心…」とある。

（11）惠谷隆戒「源隆國の安養集の研究」（『印度學佛教學研究』一四・一九五九年）等を參照。

（12）石田茂作『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』（東洋文庫、一九三〇年（原書房、一九八二年再版））に詳細な研究がある。井上光貞『日本淨土教成立史の研究』（前掲）はこれをまとめ、さらに大谷旭雄「善導『觀經疏』流傳考」（『淨土學』三〇・一九七七年）は再整理している。

（13）梯信曉『宇治大納言源隆國編　安養集　本文と研究』（西村冏紹監修、百華苑、一九九三年）一五二頁～一五九頁。

（14）大正一二・三四四頁下。

（15）大正一四・五三八頁上中。

（16）大正三二・五八〇頁下。

（17）大正三七・一九三頁下。

（18）大正三七・二三〇頁上中。

（19）大正四七・八七頁中。

（20）大正三七・一八三頁上中。

(21) 大正三七・一八四頁下。
(22) 浄全一五・五一一頁下。
(23) 大正四〇・八三三頁下～八三四頁上。『決定往生集』巻上・第三昇道決定（大正八四・一〇七頁上～中）に、「曇鸞法師往生論注云、問。廻向章中言下普共二諸衆生一往中生安樂國上。此指レ共二何等衆生一乎。答。無量壽經云、諸有衆生聞二其名號一、信心歡喜乃至一念、至心廻向願レ生二彼國一、卽得二往生一、住二不退轉一。唯除二五逆誹謗正法一。案レ此、而言一切外凡夫人皆得二往生一。又如二觀無量壽經下下品生者一、或有二衆生一、作二不善業五逆十惡一、具二諸不善一。如レ此愚人以二惡業一故應下墮二惡道一經コ歷多劫一受レ苦無窮上。如レ此愚人臨二命終時一遇二善知識一、具コ足十念一稱二南無無量壽佛一、見下金蓮華猶如二日輪一住中其人前上。如二一念頃一卽得レ往コ生極樂世界一、於二蓮華中一滿二十二大劫一、蓮華方開。當二以其償一五逆罪一也 應レ時卽發二菩薩之心一。以二此經一證、明知、下品凡夫但令下不レ誹コ謗正法一信佛因緣皆得中往生上。已上經文。今案、一義五逆報果臨終之時、轉重輕受。謂十念頃於二身四大一有二小相擊一爲二惡業果一。若生二淨土一唯有レ相似等流果一耳。全無報果以淨土生、極清淨故更無レ苦故。」とある。
(24) 大正八四・一〇七頁中。『浄全』では「下至十聲一聲等」となっている（浄全十五・四八三頁下）。
(25) 大正三七・二七一頁上～二七二頁中。
(26) 大正八四・一〇二頁下。
(27) 大正八四・一〇七頁下。

珍海撰『決定往生集』に見られる凡夫性の自覺（成瀨）

(28) 大正八四・九九頁上。
(29) 大正八四・一〇〇頁中。
(30) 大正八四・八八一頁下。
(31) 大正八四・一〇七頁上。
(32) 大正八四・一〇八頁下。
(33) 坪井俊映『法然浄土教の研究―傳統と自證について』（隆文館、一九八二年）一〇三頁を參照。
(34) 大正四〇・八二六頁上中。
(35) 大正三七・二三九頁上。
(36) 大正四〇・八四四頁上。
(37) 大正二五・六二頁下～六三頁上。
(38) 大正八四・一〇三頁上。
(39) 大正一二・三五三頁上。この引用は『往生拾因』（大正八四・九二頁下）にも見られる。
(40) 南都浄土教への『往生要集』の影響は、井上光貞『日本浄土教成立史の研究』（前掲）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、一九七九年）、大谷旭雄『法然浄土教とその周縁』乾（山喜房佛書林、二〇〇七年）等を參照。
(41) 大正八四・五八頁上中。
(42) 浄全九・四八五頁上。
(43) 大正三七・二七〇頁下。
(44) 梯信曉『宇治大納言源隆國編 安養集 本文と研究』（前掲）を參照。

(45) 井上光貞「法然と永觀」(『日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九五六年（新版一九七五年))。

(46) 伊東昌彦『吉藏の浄土教思想の研究　無得正觀と浄土教』(春秋社、二〇一一年）等を參照。

(47) 大正八四・一〇三頁上。

(48) 大正八四・一〇三頁中。

(49) 大正八四・一一四頁下～一一五頁上。

(50) 迦才撰『浄土論』では方啓法師となっている（大正四七・九七頁上)。

(51) 大正一二・三四三頁中。

(52) 『往生論註』巻下（大正四〇・八四四頁上）に、次のようにある。

當復引例示自力他力相、如人畏三塗故受持禁戒。受持禁戒故能修禪定。以禪定故修習神通。以神通故能遊四天下、如是等名爲自力。又如劣夫跨驢不上、從轉輪王行便乘虛空遊四天下無所障礙、如是等名爲他力。愚哉後之學者聞他力可乘當生信心。勿自局分也。

無量壽修多羅優婆提舍願生偈略解義竟

經始稱如是彰信爲能入、末言奉行表服膺事已。論初歸禮明宗旨有由、終云義竟示所詮理畢。述作人殊於茲成例。

(53) 大正八四・一一五頁上中。

(54) 伊東昌彦『吉藏の浄土教思想の研究　無得正觀と浄土教』(前掲）一六七頁を參照。

(55) 大正三七・二四五頁中。

(56) 大正八四・一〇七頁中。

〈キーワード〉珍海、決定往生集、凡夫觀、深心釋